

子宮がん検診（車検診）

動 向

検診車による子宮がん検診は、昭和43年度から県の委託事業として始まり、昭和47年度から横浜市よりの委託も開始された。昭和58年度からは老人保健法施行に伴い実施主体が市町村に移行し現在に至っている。

神奈川県予防医学協会では県下市町村からの依頼に基づき検診車を配車し、現地で問診と協力大学病院産婦人科医師による細胞採取を行い、その後協会検査センターで、細胞診断と検査成績の作成・通知・追跡管理などを行っている。

精度管理向上のため、「子宮がん車検診検討会」ならびに「同報告会」を開催している。「子宮がん車検診実施検討会」では、検診に協力している県下の北里大学・東海大学・横浜市立大学・聖マリアンナ医科大学・日本医科大学武蔵小杉病院の産婦人科及び県立がんセンターの婦人科腫瘍専門医が車検診の集積データを検証し、発見症例の再検鏡等を実施し精度管理の維持向上に役立てている。また検診の実務上必要な情報交換を行って、次年度の検診の精度向上に努めている。

また、検診に協力の上記大学及び県立がんセンターに加え、県産科婦人科医会の代表医師に対し「報告会」を開催し、県内の子宮がん検診活動のモデル事業となるよう努めている。さらに、これらのデータは学会にも報告され、全国の子宮がん車検診の精度管理向上に活用されている。

細胞診報告様式の改正に合わせて、車検診でも平成21年4月から日母分類からベセスダシステムに改定された。それに対応するよう受診票と集計等のシステムを変更している。

なお、平成21年度には、20～40歳まで5歳きざみの婦人に、子宮がん検診無料クーポン券が配布された。子宮がん検診の普及を目指す政府の施策で、受診者の増加が期待される。

子宮頸がん検診結果

2009(平成21)年度的車集検受診者の総数は24,853名で、昨年度の実績より3,766名増え、昨年に比べ15.2%の大幅な増加を示した。4年度連続の増加傾向でもある。受診間隔が2年に1度に変更された影響が本年度も懸念されていたが、関係各位の熱意と検診無料クーポン券のお陰であろう。年齢階級別では、やはり60歳代が最も多く、次いで40歳代、50歳代と30歳代の順で、従来とほとんど変わらない。期待された30歳未満の受診者は747名、3%に止まっていた。40歳未満では20.2%である。一方、初診者(初めての検診受診者、9,434名)率は38%を占め、昨年の31.9%を上回った。うち若年者の割合は30歳未満6.9%、30歳代27.7%で、昨年とほぼ同じだった。

要再検・精検率では、細胞診LSIL以上(旧分類クラスIIIa以上)の要精検者は0.47%(117名)、ASC-US(クラスII再検)などによる要再検者は0.70%(174名)だった。昨年のそれぞれ0.37%、0.61%をいずれも上回っていた。両者合わせた要再検・精検率は1.17%で昨年の0.98%、一昨年の0.74%より高かった。再・精検の実施率は平成22年7月末の集計時点で90.38%、うち精検者87.18%、再検者92.53%で、例年通りの高い水準だった。

本年度から実施されたベセスダ・システムによる細胞診判定の詳細は表2の如くである。また、旧クラス分類との比較は、表3を参照されたい。

要再検・精検者の再検・精検結果は表4～表6の如くである。発見癌のうち頸癌は13例(上皮内癌9例、Ⅲ期1例、病期不詳2例、腺癌1例)で、早期癌の頻度は69.2%で、昨年の84.62%より低かった。頸癌発見率は0.05%と例年レベルだった。初診者からの頸がん発見率は0.08%と高く、一方、再診者(検診受診経験者)のそれは0.03%と低かった。要再検群からの3例を除いて10例は要精検群から発見されている。年齢階級別では、本年度も30歳未満では癌は発見されなかった。初診者での癌発見率は40歳代で0.13%と高く、30歳代0.08%、50歳代0.07%、60

歳代で0.05%、また70歳以上では少数ながら0.25%だった。初診者の多い30～49歳の若年者で高い頸癌発見率を示した。

発見された異形成は84例(軽度41例、中等度30例、高度13例)である。異形成発見率は0.34%で、昨年の0.21%に比べ大幅に高い頻度となった。初診者の異形成の発見率は0.48%と一層高く、年齢階級別では30歳未満0.92%、30歳代0.77%、40歳代0.39%を示し、比較的若年初診者に高かった。しかし、50歳代でも0.52%、60歳代0.10%を示していた。再診者からも、異形成は0.25%の高頻度で発見され、とりわけ30歳代で0.66%、40歳代では0.62%と高い頻度だった。繰り返し受診者であっても異形成の発見頻度は低くないことを銘記してたい。

細胞診判定ASC-USを中心とする結果のため要再検となった者174名から、24例(発見率0.10%)の異形成(軽度13例、中等度9例、高度2例)、また頸癌3例(0期1例、Ⅰb期癌以上1例、病期不詳1例)(発見率0.01%)が発見されている。

子宮頸癌以外の癌では、体癌が1例発見された。本車検診の受診者の中で、クーポン券利用者が2,000名含まれていた。これらのうち、1,566名は初めての検診受診者だった。初診率は78.3%と極めて高い。初診者のうち、異型細胞の出現率は1.4%(28名)とクーポン券非使用者の0.54%に比べ大変高かった。細胞診判定の内訳はASC-U13名、LSIL9名、HSIL4名、SCC2例だった。SCCの2例は共にCISの最終診断を得た。

評 価

以上、本年度に実施された検診は、適正に処理される実績を示した。

平成16年から子宮がん検診が見直され、20歳以上の婦人に2年毎に実施されるシステムとなった。また、横浜市での車集検が中止された。このような変動期にあつて、一時、車集検の受診者が激減したが、ここ3カ年は増加傾向を示しており、特に本年度はクーポン券の配布もあつて、近年にない増加を示した。しかし、若年者の受診は低迷しており、30歳未満では3%、40歳未満でも20.2%に止まっていた。20、30歳代の若年者では異形成や頸癌の発見率が高いところから、若年者の子宮がん検診受診が一層勧奨される。今後、若年者の子宮がん検診受診の意識が車検診を通じて涵養されること、さらには他の検診システムも含めて若年者の検診が広く普及することを期待したい。

子宮頸癌ならびに異形成の発見率は初診者に高いことはこれまでの統計通りであり、未受診者への受診勧奨に一層努めたい。一方、再診者での癌発見率は著しく低下するものの、異形成の発見率は0.25%と高率を示していることから、再診者へも定期的な検診受診の継続が勧奨される。

本年度から開始された子宮がん検診無料クーポン券は、未だ少数例の経験ながら、若年者での検診受診の掘り起こしと、高頻度の癌と異形成の発見に貢献していた。継続性に期待される。

平成19年にがん基本法が施行され、がん検診精度管理の重要性が指摘されている。確立された本車検診での年次集計は、子宮がん検診の精度管理の先駆けとなろう。また、がん検診受診率50%の目標も掲げられている。この目標近づこう、車検診でも一層充実した活動を行って行きたい。

細胞診報告様式が、ベセスダシステム準用の日本産婦人科医会分類に改訂された。本車検診でも本医会分類に則って報告するよう、本年度から改められた。移行はスムーズで車検診の精度に障害となっていないと思われる。一方、要再・精検の頻度が上昇した原因として、ASC-USなど新しい分類によるとの意見がある。今後の検証が必要であろう。

関係の集計表は96頁に掲載